

・Ⅱ期【平成29年8月3日（木）】

午前の講義では、これからの高等学校に求められる授業改善の視点として、言語活動の充実やCAN-DO形式での学習到達目標の活用についてご講義いただいた。言語活動に関しては、生徒が得た知識をより活用できるようにさせるための効果的な言語活動にしなければならないことを再確認できた。

午後の講義では、英語教育の現状と課題、グローバル化に対応した英語教育改革の方向性、学習指導要領改訂の視点などについてお話があった。学習指導要領の改訂や大学入試改革に伴って、現在の、また、これからの英語教育に求められていることを再確認できたとともに、自分の授業改善を日々行っていくのはもちろん、中堅教諭として学校組織全体のなかでの自分の果たすべき役割についてもしっかりと自覚し、職務を果たしていきたいと思った。

・Ⅲ期【平成29年9月8日（金）】

午前に行われたいじめに関する講義では、改めて、いじめ防止対策推進法におけるいじめの定義を確認し、その内容を生徒や保護者にも周知させること、また、いじめの事案が発生したときは1人で判断せず、組織で、かつ、迅速に対応することの重要性を再確認した。

午後の教育相談に関する講義では、教育相談をする際の注意として、相手の考えや行動に先入観や決めつけを持たないこと、冷静ながらも温かい気持ちで接することが大事であることを再確認できた。

気になる生徒の事例に関する協議では、グループで各自の気になる生徒に関する事例を発表し、より良い対処法がなかったかなどについて協議した。五城目高校と明徳館高校の先生と同じグループであったが、それぞれの学校毎に生徒の状況や抱える問題の内容が大きく異なりとても勉強になった。

・Ⅳ期【平成29年10月19日（木）】

午前の講義では、キャリア教育とは「どのような人間になり、どう生きていくことが望ましいのかといった長期的展望に立った人間形成を目指す教育」であり、その中で育むべき4つの能力などを確認することができた。また各学校のキャリア教育の全体計画を比較・分析し、改善点などを話し合うことができ、とても勉強になった。

午後の情報教育については、授業におけるICTの活用例をいくつか知ることができた。また、教育現場における情報管理や著作権問題などに関する危険性についても再確認することが出来た。道徳教育については、小中学校では教科化されることもあり、高校においても様々な活動を道徳というフィルターを通して見直していく必要があると感じた。

・Ⅴ期【平成30年1月11日（木）】

今年度の高等学校中堅教諭資質向上研修講座においての最後のセンター研修であった。最後ということもあって振り返りの時間が多かったが、まだまだ経験も勉強も不足おり、これからさらに経験や研修を重ねていく必要性を感じた。

佐藤進主任管理主事からは、改めて教育公務員の服務を確認した上で、全体の奉仕者としての意識を強く持って生活し、信頼を失わないためにも絶対に不祥事を起こさないことを強くお話いただいた。

亀沢勉指導主事からは、今までの10年のキャリアを活かしながら、今そしてこれから自分に求められる使命を自覚し、その任務を全うする努力をするよう励ましを頂いた。また、樋口隆センター副所長の講話では、改めてコミュニケーションの大切さをお話し頂いた。

## ②授業研修【平成29年9月4日（月）】

秋田県立秋田南高等学校を会場に、2校時～4校時の授業をお借りして授業研修をさせて頂いた。

授業の内容は新しいレッスンの導入部分を行うものだったので、レッスンのテーマであるアフリカの水問題について考え関心を持たせることと、本文の内容を理解しその内容を相手に自分の言葉で伝えられるようになることを目標に行った。初対面の生徒との授業で緊張した雰囲気であり、思うように展開出来なかった部分が多かったが、目標は概ね達成できた。

午後の協議では、それぞれの授業者の授業内容について良かった点や改善が必要な点を話し合い、その中で多くの発見や学びがあった。また、指導主事の先生方も交えて、現在及びこれからの英語教育について協議を行い、これからは様々なことに関心を持ち、積極的に他者と関わり合いながら英語を使って情報をやりとりできる生徒を育てていく必要があることを確認した。また、そういった生徒を育てるためには、変化を恐れず、新しいものも取り入れながら授業改善を重ねていく必要があることも確認できた。

## 英語科「コミュニケーション英語Ⅰ」 学習指導案

実施日時：平成29年9月4日（月）3校時

場 所：秋田県立秋田南高等学校1年F組教室

対 象：1年F組

授 業 者：大塚 のぞみ

教 科 書：Revised ELEMENT English Communication I

1. 単元名 Lesson 6 The Story of PlayPumps —ideas for the future—

2. 単元の目標

- (1) プレイ・ポンプの計画について学び、事業の失敗がなぜ起こったのかを理解する。
- (2) 失敗から学ぶことの重要性を理解し、世界の水問題を解決する方法を考える。

3. 単元と CAN-DO 形式での学習到達目標との関連

- ・学習した語句を使用している単文を、読んで理解することができる。

[Grade1 READING]

- ・教科書で学んだ英文を1文ずつ聞いて理解することができる。[Grade1 LISTENING]



(2) 指導計画

過程	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 (10)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Introduction</li> <li>・ アフリカが抱える水問題について考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 写真を使って、アフリカの水問題について確認し、その解決策の一つとしての PlayPump を紹介する。</li> </ul>	A
展開 (30)	<b>Goal 1 What is a PlayPump? Who is Laura Bush?</b>		C
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新出単語の意味や発音の仕方を確認する。</li> <li>・ 本文の CD を聞き、ペアの相手に Part1 のあらすじを伝える。</li> <li>・ プリントの質問に答える。</li> <li>・ Goal 1 の質問に答える。</li> <li>・ Part 1 の本文をフレーズ毎に区切りながら読む。</li> <li>・ ペアで Part 1 の本文をフレーズ毎に日本語から英語にできるか確認する。</li> <li>・ 本時の目標②を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ プリントを使って、新出単語の意味や発音の仕方を確認させる。</li> <li>○ Part1 の概要を確認しながら聞くよう促し、CD をかける。</li> <li>○ プリントの質問に答え、ペアの相手と解答を確認するよう指示する。</li> <li>○ Goal 1 の質問をし、生徒が Part 1 のポイントを理解しているか確認する。</li> <li>○ フレーズ毎の意味を考えながら音読するよう指示する。</li> <li>○ 教科書をなるべく見ずに英語にできているか確認する。</li> </ul>	
	<b>Goal 2 Let's retell the story of part 1!</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ リテリングの内容を各自考える。</li> <li>・ グループになり、写真を指しながら 1 人ずつ Part1 の内容を自分の言葉で説明する。</li> <li>・ グループ内で最も分かりやすく内容を伝えられた人を選ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教科書本文を引用するだけのリテリングにならないよう内容を工夫するよう促すとともに、必要に応じて支援する。</li> <li>○ 何人かの生徒を選び、発表させる。</li> </ul>	B
まとめ (10)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ リテリングで発表した内容をプリントに書いて整理する。</li> <li>・ 板書を見ながら本時のポイントを確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ リテリングで発表した内容をプリントに書いて整理するよう指示する。</li> <li>○ 板書を使って本時のポイントを振り返る。</li> </ul>	

(3) 特定課題研究

## 特定課題研究レポート

所 属 校	秋田県立横手高等学校	職・氏名	教諭 大塚のぞみ
研 究 分 野	(A) 教科指導    B 学級・学年・学校経営    C 生徒指導 D 進路指導    E 特別活動に係る指導    F 総合的な学習の時間に 係る指導    G 特別支援教育に係る指導    H その他		
研 究 テ ー マ	主体的・対話的な学習活動を通して思考力を育成する授業実践		
<p>1 研究の概要</p> <p>ますます多様化するこれからの社会の中で、生徒たちが周りの人たちと協働しながら物事を的確に判断しより良いものを作っているようになるためには、様々な能力を身に付ける必要がある。その中でも特に「思考力」は今最も重要な能力であると考え、思考力育成を今回の研究テーマに選んだ。学校の教育活動の中でも、最も思考する場面の多い教科指導をその研究分野とし、特にコミュニケーション英語Ⅱの授業において様々な取り組みを実践した。</p> <p>取り組みの大まかな内容は、①学習した内容を、絵やキーワードを使って分かりやすく相手に説明する活動。②対話的な学習活動を多く取り入れ、協働作業を通してより良い答えを見つける活動。③学習した内容について1問1答式の質問をするのではなく、学習内容を踏まえながら自分の言葉で意見や考えを答えなければならない発問を多くすることなどである。</p> <p>上記①～③のような活動を通して、主体的・対話的に課題に取り組み思考力を育成したいと考えた。</p> <p>2 成果と課題</p> <p>&lt;成果&gt;</p> <p>上記①の取り組みについては、絵やキーワードを使いながら相手により分かりやすく説明するためには、どうしたら良いかを一生懸命に考えながら活動に取り組んでいた。回数を重ねるにつれて、生徒が作る英文の内容や文章の構成が分かりやすく、より伝わりやすいものになっていた。</p> <p>②の活動については、与えられた課題についてペアやグループで取り組むことで新しい視点を得たり、食い違った解答が出たときにはより良い答えにするにはどうしたら良いかなどについて熱心に語り合う様子が見られた。こういった活動を通じて、生徒は課題について多角的に思考を深めることができた。</p> <p>③の活動については、学習内容についての単純な理解度を確認する1問1答式の質問だけでなく、自分の意見や考えを交えながら答えなければならない発問を多くしたことで、内容について深く考える機会が増え、さらに、より良い・より伝わる答えとなるように工夫する過程で思考力とともに文章力も上がったように感じた。</p> <p>&lt;課題&gt;</p> <p>生徒の思考力が深まっているかどうかを客観的に数値などで計ることはできなかったが、これからも試行錯誤を重ね、思考力を高めるための活動を継続的に授業に取り入れていきたい。</p>			

### (4) 選択研修

## 選 択 研 修 報 告 書

所 属 校	秋田県立横手高等学校	職・氏名	教諭 大塚 のぞみ
研 修 先	株式会社 楽器の店 カネキ		
研 修 期 間	平成29年8月4日(金)、5日(土)、10日(木)		
<p>1 研修の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・店内の掃除、商品の展示、商品の整理、返品の手配 など</li> <li>・YAMAHA 英語教室の見学、及び、参加。</li> </ul> <p>2 研修の成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新商品の展示をする業務を担当した際には、どのように展示すればお客様の注目を集められるかを考えるのが難しかった。しかし、その『どのようにすればお客様の興味・関心を引き出せるか』の視点は、我々の授業を行う際にも必要な視点であると思い、勉強になった。</li> <li>・商品の整理・返品の手配の作業を通して、今までは買う側の視点しかなかったが、商品の流通の仕方や売側の苦労などを知ることができ、とても勉強になった。</li> <li>・YAMAHA 英語教室の見学では、下は4歳から上は中学校1年生まで幅広い年代の子どもたちを対象にした英語教室を見学させていただいた。4・5歳児対象のクラスでは、英語は勉強するものというよりも生活の一部であるといった感覚で身に付けさせる手法が大変新鮮であった。また、歌を歌ったり、身体を動かしたりしながら楽しく学んでいく姿が印象的であった。高校の授業でも、この純粋な『英語が楽しい』という気持ちを生徒が感じられるよう工夫していきたい。小学生を対象としたクラスからは机に座っての学習となるが、複数のテキストを効果的に使いながら、生徒が積極的に英語を話していく形でレッスンが展開され、受け身にならないような工夫がなされていた。高校での授業でも生徒が受け身にならないよう、効果的に活動を取り入れていきたいと思う。また中学生を対象としたクラスでは、問題集を使った学習など知識を増やす活動が中心となり話す・聞く活動は少ないようであったが、3～4人の少人数で行われており、個々に合わせた丁寧な指導がなされていた。</li> <li>・全体を通して、子どもたちのいきいきと英語を学ぶ姿が印象的であった。改めて英語はコミュニケーションの手段であり、生活の手段であることを感じる事が出来た。高校での学習は情報量も多く、取り扱う内容も多岐にわたるが、知識を得るだけの学習に留まらず、伝え合う活動を多く取り入れ、生徒の興味関心を多く引き出しながらアクティブな授業を展開していきたい。</li> </ul>			

### Ⅲ 研修を終えて

様々な研修を通して、新しい経験と視点を得られたとともに、中堅教諭としての自覚と少しの自信も得ることができた。時代の変化に伴い高校での教育に求められることも変わっていくとは思いますが、目の前の生徒1人ひとりとじっくり向き合い、共に成長し続けたいと思う。

## 中堅教諭等資質向上研修を終えて

国語科 能美 政通

### I 校内研修

多岐にわたった校内研修であるが、授業研究に最も力を注いだ。授業を改善することで、より良い進路指導や生徒指導が行えると考えたからである。今年度は「深い学びにつながる取り組みの工夫」と「効果的な授業の振り返り」を課題に授業を行ってきたが、少しずつ手応えを感じてきているので、自身の長所・短所をしっかりと把握して今後も研鑽をつづけていきたい。

### II 校外研修

#### 1 共通研修【平成29年6月30日（金）】【平成30年1月11日（木）】

中堅教諭として、担当HRだけでなく、学年や学校、また若手教員への助言など、担わなければならない役割を改めて考えさせられた。また、自身の力量をさらに高める必要を感じた。

#### 2 教科指導等研修【平成29年8月3日（木）】【平成29年9月4日（月）】

秋田県総合教育センター主任指導主事加賀谷英一先生の「指導案がしっかりと書けたからといってよい授業ができるとは限らないが、指導案がしっかりとしたものにならないければよい授業をやりようがない」ということばを噛みしめて、指導案を再度練り直して、10月30日に本校で行われた研究授業を行った。詳細は別ページに記載。

#### 3 生徒指導等研修【平成29年9月8日（金）】【平成29年10月19日（木）】

「いじめの理解と対応」についての傾向を知ることができた。専門機関や第三者的な立場の方々の協力をいただきながら、今後も目の前の生徒のために全力を尽くしたいと感じた。また、キャリア教育、情報教育、道徳教育については、学校のビジョンを明確にして、職員全体で共有して、生徒の指導にあたることが大切であることを改めて実感した。

### III 選択研修

詳細は別頁に記載。

### IV 特定課題研究

詳細は別頁に記載。

### V 研修を終えて

中堅教諭等資質向上研修は終わってしまうが、高い志を持って今後も日々授業改善に努め、自身を磨くだけでなく若手教員の指導も積極的に行いたい。また、子どもたちに対して、身近な大人として模範的な行動をし、進路実現へのサポートをすることで、子どもたちのキャリアデザインの役に立てるとともに、専門性を有し、社会人として必須な力を子どもたちに身に付けさせたり、親身に関わったりすることで、保護者との信頼関係の構築を行っていきたい。

# 国語科（現代文B）学習指導案

平成29年10月30日（月）

指導者 能美 政通

場 所 2年6組教室

1. 単元 小説（三）「檸檬」 使用教材：「高等学校 現代文B」（第一学習社）

## 2. 単元の目標

○小説の読解を通して、作家の発想や工夫、表現の可能性に目を向け、さまざまな表現を味わう。

○小説を各自の生活に引き寄せて読んでいくことにより、人間というものに対する認識や考え方を深める。

3. 生徒の状況 男15人・女22人 計37人

文系クラス。国語を好きな生徒が多い。授業では、文章を深く読み解こうする雰囲気があり、問いの本質に迫っていく集中力がクラス全体にある。

## 4. 指導計画（全1時間）

「不吉な塊」を無化する「檸檬」の考察—「みすばらしくて美しいもの」との共通点・相違点を軸として 1時間【本時】

## 5. 評価計画

	関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
評価の観点	小説を読んで、書き手のさまざまな表現を自らに引き寄せて読み味わおうとしている。	小説を読んで、書き手が表現に込めている意図を根拠に基づいて考えている。	文脈に即して、語句の意味、用法を理解している。

6. 本時のねらい 表現力の豊かさを味わいながら、表現の効果について理解する。

7. 本時の指導過程

	学 習 活 動	教 師 の 支 援	評 価 規 準
導 入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習課題及び授業の流れについて確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習課題を板書し、生徒が十分に理解して取り組めるように確認する。</li> </ul>	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;">                     学習課題：なぜ「私」は「檸檬」を手にすることで幸福になったのか。                 </div>		
展 開 40分	<ul style="list-style-type: none"> <li>「みすぼらしくて美しいもの」と「檸檬」のそれぞれの特徴をあげる。(個人)</li> <li>グループでそれぞれの特徴をベン図を用いて「共通点」と「相違点」に振り分けて、内容をまとめる。(グループ)</li> <li>グループのメンバーを入れ替える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>表現の意味やイメージの違いを押さえられるように確認する。</li> <li>根拠の有無や意見の妥当性について吟味するよう助言する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>違いや関連性を明示しながら読みを深められている。</li> </ul> <p>※ワークシート(机間指導で確認)                      どちらもできている…◎                      根拠を明示している…○                      どちらもできていない…△</p>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;">                     発問：「みすぼらしくて美しいもの」と「檸檬」の「共通点」と「相違点」にはどのようなものがあるか。                 </div>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>各グループがホワイトボードを示して理由を説明する。(全体)</li> <li>元の席に戻る。</li> <li>話し合いや説明を踏まえて、なぜ「私」が「檸檬」を手にすることで幸福になったのかをまとめる。(個人)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>他のグループの発表を受けて補足などをし、読みをより深められるよう助言する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>根拠を明示しながら、作品の読解、また読解を経ての自己の変化に言及した鑑賞をしている。</li> </ul> <p>※ワークシート(机間指導で確認)                      どちらもできている…◎                      読解はできている…○                      どちらもできていない…△</p>
ま と め 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習内容を振り返る。</li> </ul>		

# 選 択 研 修 報 告 書

所 属 校	秋田県立横手高等学校	職・氏名	教諭 ・ 能美政通
研 修 先	秋田県仙北市学習資料館・イベント交流館(新潮社記念文学館)		
研 修 期 間	平成29年8月2日(水)、4日(金)、5日(土)		

## 1 研修の概要

1日目(8月2日)9:00~17:00(12:00~13:00休憩)

学習資料館・イベント交流館(新潮社記念文学館)等施設案内が1時間ほどで済み、バックヤード作業へ移った。仕事の内容は、寄贈図書の整理である。本を種類ごとに分類すると同時に、古い本も多いので、適宜ほこりを取ったり、本を拭いたりという作業も行った。

2日目(8月4日)9:00~17:00(12:00~13:00休憩)

午前中は、2日に整理した本が、館内にあるのかないのかを館内検索をしながら分類した。

午後は、貸出、返却、館内の蔵書整理、見回りなどのカウンター業務を行った。

3日目(8月5日)9:00~17:00(12:00~13:00休憩)

午前中は、貸出、返却、館内の蔵書整理、見回りなどのカウンター業務を行った。

午後は、カウンター前のコーナーの企画、展示、HPの記事作成を行った。

## 2 研修の成果

図書館の役割や司書の業務ということについて、いくらかは理解していたつもりでいたが、実際に研修させていただくと、実に多くの業務を効率よくてきぱきと行っていることがわかった。貸出、返却の対応のみならず、レファレンスや他の図書館とのやり取りや企画の準備や本の修繕などである。夏休み期間ということもあり、小学校の自由研究などで関連する本を探しに来たり、年配の方でも郷土の研究でいらっしゃったり、必要な情報がどのような本に載っているかとか、どのコーナーに行けばよいかを適切にアドバイスしたり、いっしょに探したりしていた。私もカウンター業務を担当しながら地域の子もたちやお年寄りの方と関わることができた。専門性はもちろん必要であるが、まずは利用者視点に立って寄り添うようなあり方自体は普段の学校での業務と通じるものがあると感じ、貴重な体験であった。

研修最終日はコーナー展示の企画を行ったが、利用者に興味を持ってもらえるような、かつ他の本への関心が広がるようなテーマを考えようと思ったが、「20冊選んでください」と言われながら、10冊選ぶのもやっとだった。「借りられないこともありますよ」と言ってもらったが、企画の前にいまどのような本が読まれているかや、季節のものを取り入れたり、ポップを工夫したり、そのような準備がまだまだであると感じた。学びたいことに「プレゼンテーション能力を高める」と書いたものの、いかに普段自分が職場で積極的に提案をしたり、他の先生方をリードしたりしていないかを思い知らされた。自分では工夫しているつもりでも、どことなく決められたことを決められたようにやっていたところがあったのかもしれないと反省した。しかしながら、普段と違う場で働くことで、改めて自分の資質や能力を知るとともに、今後補ったり、さらに磨かねばならないことがどのようなことなのかなどに気づくことができたという意味では、大変有意義な研修であった。

## 特 定 課 題 研 究 レ ポ ー ト

所 属 校	秋田県立横手高等学校	職・氏名	教諭 ・ 能美政通
研 究 分 野	<input checked="" type="radio"/> A 教科指導    B 学級・学年・学校経営    C 生徒指導 D 進路指導    E 特別活動に係る指導    F 総合的な学習の時間に係る指導 G 特別支援教育に係る指導    H その他		
研 究 テ ー マ	主体的・対話的で深い学びの実現へ向けて		
<p>1 研究の概要</p> <p>「主体的」・「対話的」・「深い学び」をキーワードとしながらも、課題は「深い学びにつながる取り組みの工夫」と「効果的な授業の振り返り」である。理由としては、研究テーマ設定前に、本校で実施している授業アンケート（「教員の授業について」を4段階で評価する）において、担当している7つの授業の平均が、「生徒の思考を促し、深い学びにつながるような取り組み（グループ活動の導入や発問の工夫など）が行われている。」が3.7、「一方的な授業でなく、生徒の考えや発言を引き出し、受け止めてくれる。」が3.7、「授業内容に興味、関心がわき、主体的に参加できる授業である。」が3.6であるのに対して、「生徒の理解度を確認しながら、わかりやすく授業が進められている。」が3.5、「学習課題等を用いて、学習内容の振り返りが行われている。」が3.5、「授業内容が身に付き、学力が向上していると実感できる。」が3.4であったからである。授業でさまざまな活動を導入しても、授業でどのようなことを身に付けたのか、そしてまたその内容や授業で養われた力がどのように生かされるのか、わかっていない生徒がいるのでは意味がない。取り入れようとした活動自体は悪くなかったのかもしれないが、教材研究が不十分だったり、その授業でどのような力を養うかポイントが絞られていなかったり、板書計画が不十分だったり、意図が伝わりづらくなっているということがあるのだと考え、上記の課題を解決するために、教科内外を問わず、他の先生方の授業を参観し、授業の進め方や板書などを分析するところから研究をはじめた。参観した後には互いに授業改善に向けて意見交換をして話し合いを深めることで、自身の強み・弱みを知ることができた。強みは読みの精度、教材研究の強度であり、弱みは授業作りや展開自体がパーソナリティに負うところが大きく、授業の再現性が乏しいということだ。簡単に言えば、授業の工夫が指導案等に反映しきれないところがあるということだが、これは単に技術的な問題でもある。10年を経過してもなお、満足に指導案が書けないということは恥ずべきことだが、自分の良いところ・悪いところを見極めて研究をはじめた。</p> <p>上記課題の克服のために、現代文（2年生3クラス担当）の授業改善に取り組むことにし、教材については詩を選んだ。評論や小説教材が不向きとは言わないが、詩に比べると評論や小説は読み取る筋の方向性が定められているきらいがあり、自由度が制限されては主体的な読みも損なわれやすいと考えたからである。また、筋が明確であれば、読みも一方向に向かいやすく、正解を気にしての読みは些か窮屈であるとも考えたからである。誰もが同じ読みに収束するのであれば、そこに「わたし」が読む意味を見出せない生徒もいるのではないかと考えた。一方で、学習において自己変容を意識しない生徒にとっては、拡散していく読みに困惑するだろうとも考え、その対処もした。次に、「対話的」ということであるが、読みの自由度が高いということは、異なる読みが提示されやすいということであり、異なれ</p>			

ばこそ、主体的に読んだ結果として、「なぜそのような読みになったのか」を相互理解へ向けて話し合いを深めるはずであるからだ。最後に「深い学び」であるが、異なる読みを互いに検討していく中で、否応なく、自己の読みが、自身のものの見方や考え方に由来していることに気づくだろう。さらには、生き方とも強く結びついていることに思い至る。平素、授業ではテキストを読むという活動を行っているわけであるが、我々が目にしている一切、つまり世界そのものをテキストとすれば、生きることはとりもなおさず読むことであると考えることができる。加えて、生徒の視点、つまり世界解釈は一人として同じということはあるまい。その異なる読みを検討するということは、それぞれの立場を尊重し、存在そのものを受け入れることではないかと考えている。

## 2 成果と課題

以上を重視した授業で、考査や模試、受験はどうするのだという意見は、研究授業後の協議などでもいただくことは少なくない。しかしながら、読みの程度に差はありこそすれ、生徒一人一人が作品に向き合い、感じ取ったものは真実そのものである。そこには間違いなどありようもなく、互いの違いを前提とすることなしには、共感も理解もないと考える。互いの読みの筋は違っても、なぜそのような読みに至ったか、その過程を丁寧に伝えていく中で、自己の読みに疑問を感じる者の意図に寄り添ったり、根拠が提示されたりして、解答を作成する際に求められる論理性は担保されるものと考えられる。

さらには、これらの授業をできるだけ、方向性を定めずに行うことを心がけた。教材や活動で生徒の自由度を増しても、結局のところ、授業者の顔色を窺うようになってしまっただけだからだ。そのような意味では、作品の核心に迫ることなく、おしゃべりで終始してしまいかねない危険も背負うことになるわけだが、毎時間ではなくても、そのような機会を設けることで、思考を深めたり、話し合いを深めたりする場面で、大きなうねりをつくることができたのだと感じている。

もちろん、評論や小説の授業作りを否定したいわけでもなく、方向性が定められた授業、安全安心の中で思考を深めたり、読みを深めたりする授業がいけないと言いたいわけでもない。ただ、授業者が拡散したり、逸脱したりする危険を背負い込んででも、生徒に自由を手渡さなければ、「主体性」や「対話」や「学びの深さ」をどれだけ保証しうるかと、いうことである。繰り返しになるが、誰が読んでも同じなら、主体的になりにくいだろうし、話し合うまでもなく、確認で済んでしまい、授業が平板なものになってしまうのではないだろうか。

成果についてであるが、半年後の授業アンケートの「生徒の理解度を確認しながら、わかりやすく授業が進められている。」、「学習課題等を用いて、学習内容の振り返りが行われている。」、「授業内容が身に付き、学力が向上していると実感できる。」という項目について、年度当初の形式（細かに方向性を定めた授業）で授業を行ってきたクラスで、3.4、3.5、3.4、方向性を定めながらも、自由度が高いテキストを取り上げてきたクラスで、3.6、3.6、3.5、方向性を定めずにも、自由度が高いテキストを自由に読ませてきたクラスで、3.8、3.7、3.7という結果であった。思考を深めるのに有効だった活動について自由記述もしてもらったが、ポイントが高かったクラスは話し合うメンバーが入れ替わる活動や、ギャラリートークなど自由に見て回れるものを好み、プレゼンテーションにも意欲的であった。

課題は、生徒との関係に寄りかかり過ぎているところだ。しっかりと問いや言葉を吟味して、もっともっと効果的な授業運びを意識しなければいけない。現在のようなスタイルでの授業は、これから先は通用しなくなるだろうと感じている。私の熱量のみで引っ張るのではなく、学習課題や発問、授業展開そのもので、作品の魅力を伝える中で、生徒を引きつけられるように、中堅教諭等資質向上研修が終了してからも、日々研修に努めたい。

# 高等学校教職5年経験者研修講座を受講して

国語科 藤田 香苗

## 1 はじめに

「高等学校教職5年経験者研修講座」は、授業改善、生徒指導等の専門的な事項についての研修を通して、実践的な指導力の向上を図ることを目的として、採用6年目の教諭を対象に行われる講座である。今年度は秋田県総合教育センターにおいてⅠ期とⅡ期の講座が実施された。以下、講座の内容と自分自身が得た成果についてまとめた。

## 2 Ⅰ期（平成29年6月16日）

### (1) 日程

10:00～10:10…あいさつ

秋田県総合教育センター主幹 嵯峨 康弘先生

10:10～12:00…生徒理解と人間関係づくり

秋田県総合教育センター指導主事 高橋 華子先生

13:00～14:00…学校教育目標とホームルーム経営

秋田県総合教育センター指導主事 森川 剛先生

14:00～14:10…休憩・移動

14:00～16:15…これからの高等学校に求められる授業改善①

秋田県総合教育センター主任指導主事 加賀谷 英一先生

### (2) 内容等

「生徒理解と人間関係づくり」の講座では、生徒理解の視点、人間関係づくりの2点についての講義を受けた。生徒理解の視点については、人は外界の出来事に対して主観的意味づけをしていることを認識した上で生徒に対応することが大切だということがわかった。また、生徒の問題行動についての理解や対応の仕方についても学んだ。その後グループに分かれて構成的グループエンカウンターを実際に体験した。

「学校教育目標とホームルーム経営」の講座では、学校の教育目標を踏まえた学級経営の方針づくりや、SWOT分析について知ることができた。この分析方法は、S（強み）、W（弱み）、O（機会）、T（脅威）という観点でホームルームを分析し、それぞれの観点を組み合わせてホームルームを理解することによって特色づくりや問題解決に役立てるというものである。講座では実際に自分が担当しているクラスについて分析し、その結果を他の参加者と話し合った。今回学んだSWOT分析を活用して学級の強み・弱みを理解し、クラス全員が生き生きと活動できる経営に取り組んでいきたい。

「これからの高等学校に求められる授業改善①」では、国語科の講座に参加した。事前に各自でまとめた教科指導の課題と解決策について参加者で話し合い、教科指導についての現状や課題について共有することができた。9月の研修では、今回の話し合いに

基づいて実際に勤務先の学校で解決策に取り組んだ結果について発表し、協議を行った。

### 3 II期（平成29年9月1日）

#### （1）日程

10：00～12：00…教師が使えるカウンセリングの技法

秋田県総合教育センター 指導主事 小野寺 佑先生

13：00～16：15…これからの高等学校に求められる授業改善②

秋田県総合教育センター主任指導主事 加賀谷 英一先生

#### （2）内容等

「教師が使えるカウンセリングの技法」の講座では、教育相談に当たっての考え方について講義を受けた後、教育相談で使える技法について実践的な演習を行った。はじめに、教育相談に当たっての考え方については、生徒や保護者から相談を受けた際、教員から見て問題ないように見える場合であっても相手にとっては初めて経験することなのだからしっかり耳を傾けること、解決策を教えるのではなく気持ちの整理を手伝うのだということ、質問に込められた気持ちに共感することなどの姿勢が大切であることを学んだ。また、問題と原因について考える際、直線的思考と円環的思考があるが、人間関係の問題について考える時は円環的思考で複数の原因を考え、1つの出来事に2つ以上の疑問と複数の仮説を立てる習慣をつけるのが大切であるということだった。次に、スケーリング・クエスチョンの演習で、3人グループになり、それぞれ相談をする役、受ける役、観察する役に分かれて実際に相談を行った。

「これからの高等学校に求められる授業改善②」では、国語科の講座に参加し、参加者が持参したレポートに基づく発表と協議を行った。レポートの内容は、前回の研修で自分が立てた目標に基づく授業指導案と、その実践内容である。教材はそれぞれ詩「永訣の朝」、国語表現「手紙の書き方」、古文『伊勢物語』、漢文『史記』だった。取り組んだ結果について紙芝居プレゼンによって発表し、その内容についてグループに分かれて協議した。私は「振り返りの徹底」という目標を立て、『史記』の授業において実践したが、授業時間内で口語訳や語句などの知識的事項を扱うので精一杯で、なかなか効果的な振り返りをするのが難しかったという結果を発表した。協議の中で、授業の振り返りは授業の始めの見通しと繋がるものであって、生徒自身がどんな力が身に付いたかをメタ認知によって振り返ることが重要だということがわかった。振り返りについては現在も試行錯誤しているので、今回の気づきをもとに今後の授業で実践したいと考えた。

### 4 おわりに

初任から6年目を迎え、研修への参加や研究授業の機会が減る中で、今一度普段の教育活動について振り返る契機となった。今年度は1年生から担任している学年の最終学年であったので、「高等学校教職5年経験者研修講座」で得た知識を生徒面談や授業等に取り入れられるように努めた。今後も実践を継続し、よりよい教育活動ができるようにしていきたい。

# 平成29年度 高等学校3年経験者研修講座を受講して

国語科 古谷 祥多

## 1. 講座の概要

9月19日、20日の2日間にわたって高等学校3年経験者研修講座が開催された。今回の研修は採用3年目の教員と8年目の教員による合同のものであった。

19日は、高校教員のみで、各自が撮影したビデオによる授業検討を行い、中高指導主事の先生より指導助言を頂いた。20日は、中学校の先生方と合同で授業検討を行い、更に授業づくりについての演習を行った。授業づくり演習の内容としては、新聞記事の抜粋を用いて、「とにかく楽しい授業」を構想するというものであった。

## 2. 講座に向けた自身の取り組み

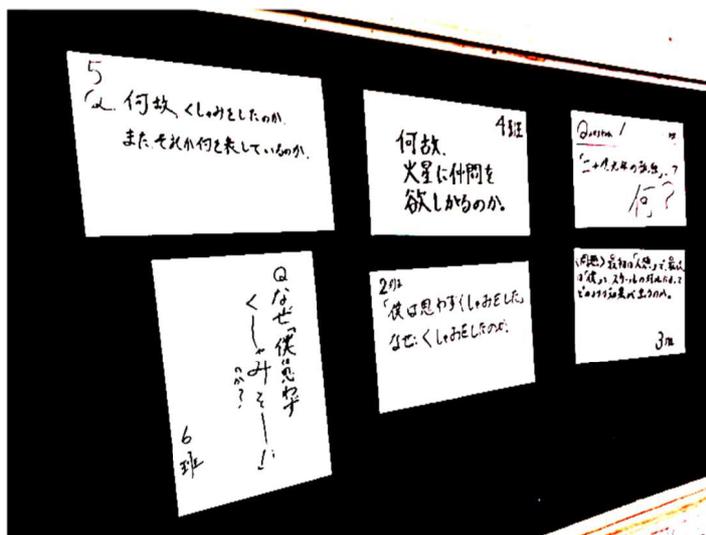
### (1) 授業実践ビデオについて

今回私が用意した授業実践のビデオは、課題発見型の授業を意図して実践したものであった。新しい学習指導要領において中心となる文言として「主体的・対話的で深い学び」というものが掲げられているが、これまで私はその「主体的学び」の実現を目指し、読みの初期段階では生徒が自ら主体的に課題を発見し、その課題を基にしてグループワークを中心とした「対話的」活動を通して読み深めていくという授業実践を多く行ってきた。

右に示した画像1は、詩「二十億光年の孤独（谷川俊太郎）」を扱った際に、班から出てきた疑問点をホワイトボードにまとめさせたものである。このように、それぞれが疑問を持ち、それを課題として、解決に向けて対話的活動を行っていくという形で、様々な単元の授業を実践してきた。

ホワイトボードを用いるのは、これを活用することによって、グループでまとめる作業が活発化することを狙ったものである。ホワイトボードに書くという作業があると、生徒は話し合いに必然性を感じることができる。加えて、全体での考えの共有も行いやすくなり、同一内容を整理・分類したり、対立構造を示しやすくなりなどの効果もある。

この手立ては、単元や教材がどのようなものであっても行うことができ、なおかつ生徒から出てきた疑問を基にした課題であるため、生徒に学習意欲が喚起されやすいという利点があると考える。



画像1 班ごとのホワイトボード

## (2) 研修参加に向けての自身の課題

研修に参加するにあたって、評価をどのように適切に行えばよいのかという点や、一回の授業を通して、生徒が本時でどのような力を身につけたかを実感できる方法、実際に身に付いているかどうかを把握する方法など、評価に関する内容を自分自身の課題とし、さまざまな先生からアイデアやご助言いただきたいと考えて研修に臨んだ。

## 3. 研修を受けて

初任研を共にした先生方の授業ビデオを久しぶりに拝見して、それぞれの成長を感じるとともに、今一度自分の授業を改善し、よりよくしていくという気持ちや、様々な手法を試して挑戦するという意気込みを持つことができた。授業の手法として印象的であったのは、黒板とA4の用紙を使ってクラス全員でKJ法を行うという形のものである。様々なアイデアを積極的に取り入れていることが生徒の意欲を喚起しているように思われた。

8年目の先生方の授業には、アイデアが多々ちりばめられていて、自分の授業改善にも是非役立てたいと感じた。とりわけ印象的だったのが、文法事項をアクティブラーニングの手法を用いて掴ませるというやり方で、ともすれば退屈さを感じさせてしまう文法の学習を、手法によって生徒たちの意欲を高めることができるという点は大変参考になるものであった。学習内容が文法事項であれば、生徒も本時に身に付いた能力を実感しやすいし、またこちらも把握しやすいと感じた。

また、毎時間の授業の振り返りについて、中学校の先生方は、毎時間の振り返りをしっかり書かせる振り返りシートを用意しているなど、私が日常の授業で取り扱いきれない部分について細やかな指導がなされていると感じた。ただし、その振り返りシートの記載にあたっては、単なる感想に終止してしまう場合もあるということだった。自分が取り入れる際には、感想ではなく、本時の振り返りとなる手立てを考えて行いたい。

授業づくり演習は、クニマスに関する新聞記事を用いて、「とにかく生徒に面白いと思わせる授業をつくる」というものだった。グループに分かれて討議を行いながら授業案を作成した。同じ教材を扱っても取り上げ方によって教材の魅力は大きく変わることを実感した。高校の先生方の教材に対する分析の深さと、中学校の先生方が持つアイデアの豊富さを強く感じた。

## 4. おわりに

様々な先生の授業を拝見するのは、自分にとって大きな刺激となる。今回は、初任研を共にした先生や8年経験者の先生、さらに校種の違う先生の授業を拝見することができた。加えて、それぞれ全く異なる立場で一つの授業を考えるという、貴重な体験をすることができた。

中学校の授業を拝見するのは久しぶりであったが、やはり教具の使い方や授業構成など、大変参考になるポイントに溢れていた。また反対に、高校の授業を見ていただき、コメントを頂く場面を通して、中学校と高校を繋ぐ、国語という教科におけるキャリア教育の視点について考えを深めることができた。

今回の研修を生かして、生徒の意欲を高めることができるような教材との出会わせ方の工夫を意識して授業改善に取り組んでいきたい。

## キャリア教育実践モデル校報告

教頭 菅原敏紀

本校は平成27年度から3年間キャリア教育実践モデル校に指定され、自由研究課題を基盤に据え、授業改善（追究型学習）、自助・LHRの系統化及び委員会と特別活動の活性化を柱とした日常型キャリア教育を実践し、生徒に追究姿勢を身に付けさせることで、先行き不透明な時代に挑戦し、自己と社会を切り拓く人材（21世紀人材）の育成に努めてきた。2年間の成果としては4点があげられる。

(1) 生徒に追究姿勢が身に付いたことで、以前よりも主体的な行動や工夫が見られるようになり、部活動の例年以上の活躍や委員会活動の活性化につながった。

(2) 自由課題研究の取組により、生徒の思考力、表現力が向上するとともに、推薦・AO入試等の志望理由の明確化や大学の研究内容の理解の深化につながった。

(3) 生徒の主体性に配慮する意識が職員の中で醸成され、授業改善にも結びつくようになった。

(4) 全ての教育活動にキャリア教育の視点を取り入れ、PDCAサイクルによる業務の評価・改善を行うことにより、職員が個々の業務を新たな視点で見直す契機となった。

一方で、課題としては4点があげられる。

(1) キャリア教育実践モデル校として自由課題研究を推進することに力点を置いたため、各学年の「自助（総合的な学習の時間）」の取組との整合性が曖昧である。

(2) キャリア教育の必要性に対する職員の認識は徐々に深まっているが、全体として見ると温度差がある。研修や日常的な情報交換等により、改めて職員全体で共有する必要がある。

(3) 各学年で様々な取組をしているにも関わらず、広く認知されていない。これまで以上に生徒及び保護者に対して、本校のキャリア教育の実践や成果等を広く情報発信する必要がある。

(4) 生徒自身の変容や人間的成長の過程の記録の集積と評価のあり方に工夫が求められる。

以上の成果と課題を踏まえ、集大成の年である今年度は以下の取組を実践した。

(1) 1年「自助（総合的な学習の時間）」において、本校OBを中心に職場訪問を実施し、職業に対する理解を深めさせ、生徒の自己理解・自己管理能力及びキャリアプランニング能力の育成に努めた。また職場訪問で醸成された進路意識や課題意識、社会貢献への意欲を自由課題研究のテーマに結びつけることで、研究の質を向上させるとともに情報活用能力及び課題対応能力を育成した。自由課題研究の成果は年度末に向け、集録としてまとめているところである。

(2) 2年「自助（総合的な学習の時間）」において、個人、クラス単位で自由課題研究の深化、発展に取り組んだ。またクラス間でディベートを行うことにより、情報活用能力や人間関係・社会形成能力の育成にも努めた。加えて生徒同士が自由課題研究を相互評価した上で、学校祭や体験入学等の機会を活用してポスターセッションを行うことにより、人間関係・社会形成能力のさらなる伸長を目指すとともに、広くキャリア教育の実践や成果等を発信した。本校HPや学年通信等でも随時情報発信に努めた。

(3) 各学年におけるキャリア教育の取組や成果を記録するためファイルを用意して集積し、生徒自身の変容や人間的成長の過程を評価した。

(4) キャリア教育を学校全体で推進する体制を継続し、教科・分掌をあげて今年度の重点目標「人

材育成と自己実現」に向け、具体的手立てに即した目標を設定し、P D C Aサイクルにより検証と改善を行った。またファシリテーション研修を実施し、さらなる生徒理解と主体的で対話的な探究型学習実践に向けた授業改善に努めた。

以上の取組により、3点の成果と課題及び改善に向けた方策があげられる。

(1) 1、2年生全員を対象にした自由課題研究の実施(理数科は課題研究で代替)により、生徒の自己理解・自己管理能力及びキャリアプランニング能力、さらには情報活用能力や人間関係・社会形成能力が大きく伸長した。このことは現3年生の国公立大AO・推薦入試合格者が30名(昨年度比+12)と大幅に増加したことからも明らかである。また各大学で実施しているシンポジウムに参加し、自由課題研究のテーマや内容を発展・深化させる生徒が増加した。特に秋田県立大学、東京大学等の教授によるソフトウェア技術の振興と普及を目的にした「コンピュータシミュレーションシンポジウム in AKITA 2017」やポナンザ開発者である山本一成氏の講演会には合わせて20名を超える1、2年生が参加し、積極的な発言や質問等を行った。他にも高校教育課の事業であるメディカルセミナー及び地域医療体験等に1、2年生30名ほどが参加した。今後は生徒自身が主体的に大学や研究機関等に出向いていくような取組を行うことが課題である。課題の解決に向けては、平成30年度入学生から「自助(総合的な学習の時間)」において、生徒自らがテーマ設定し、データの収集から整理・分析を行うフィールドワーク演習を取り入れることで、地域・大学・研究機関との関わりを積極的に進める取組を準備している。

(2) 各学年におけるキャリア教育の取組や成果を記録・集積するためファイルを用意したことで、生徒の変容や人間的成長の過程を評価するシステムが定着した。ただポートフォリオ(診断的評価、形成的評価、総括的評価)等の量が年々増えており、その整理や分析が課題である。また平成30年度入学生から、調査書の記載が大幅に改善され、大学が指定する特定分野における学習成果を評価するために、優れた学習を上げたことを記載する欄等が新たに設けられることになった。以上の課題を解決すべく、ICTを活用した生徒の活動や学習情報の蓄積・履歴化と評価に向けた教員による共有化のシステム導入がすでに決定しており、本格的運用のための教員研修会を今後数回にわたって実施する。

(3) 各教科、各分掌をあげて今年度の重点目標「人材育成と自己実現」に向け、具体的手立てに即した目標を設定し、P D C Aサイクルにより検証と改善を加える一連の流れが定着した。また生徒が学習意欲を高められるよう効果的な学習課題を明示すること、生徒の思考を促しながら、主体的な深い学びにつながるよう発問の工夫に努めること、生徒が学習内容の定着や学力向上を実感できるよう振り返りを徹底することの3点を重点にした授業改善に年間を通して行った。さらに、まちづくりファシリテーターの平元美沙緒氏を招いて職員対象のファシリテーション研修を実施した。そこでは「主体的・対話的で深い学び」につながるよう、相手を「承認」し「傾聴」することで生徒の考えを受容するスキル、「オープンクエスト」による対話を促すスキル、「フィードバック」による気づきのスキル、「リクエスト」による改善に向けた方策を提示し合うスキル等の理解と習得に努めた。

3年間の指定を受けたことにより、本校では教育・入試改革に向けた対応が加速化している。ICTを活用した生徒の学習情報の蓄積・履歴化及び共有化、統計学をベースにしたエビデンスに基づく論理的な思考力・判断力を持つ科学系人材の育成プロジェクト等、今後もキャリア教育推進に向けた新たな取組を継続していきたい。

平成29年度高校生国外派遣交流事業  
(大韓民国ソウル特別市ソウル高校訪問)

英語科 教諭 武藤 雅子

期 日：平成29年12月14日（木）～平成29年12月17日（日）（3泊4日）

参加者：高校生24名

横手高校6名（熊谷清加、佐々木優花、高橋宏典、柴田龍之介、小玉洋輔、中野穂波）

能代高校3名、秋田高校6名、秋田南高校3名、由利高校3名、湯沢高校3名

引率教員6名（各校1名）高校教育課3名 企画振興部国際課（国際交流員）1名

日程概要：12月14日 9:10 横手高校 →10:30 秋田空港集合 結団式  
11:50 秋田空港発（ANA NH406 便）  
13:00 羽田空港着 国際線へ移動  
16:00 羽田空港発（ANA NH65 便）  
18:35 金浦空港着、ソウル市内へ  
20:30 ベストウエスタンプレミアソウルガーデンホテル着  
プレゼンテーションの練習 11:00 頃まで

12月15日 8:10 ソウル高校着  
8:20 歓迎式等  
9:00 科学研究プレゼンテーション  
11:00 学校施設見学、昼食  
12:55 授業参観等  
15:50 生徒はホームステイ先へ移動 引率教員はホテル

12月16日 午前中 ホストファミリーとの交流  
11:30 生徒ソウル高校集合  
11:40 昼食、記念撮影  
13:00 ソウル高校発  
13:20 国立中央博物館見学 ソウルタワー見学 明洞散策

12月17日 8:40 ホテル発  
9:00 景福宮見学～9:30  
12:35 金浦空港発（ANA NH864 便）  
18:15 羽田空港発（ANA NH407 便）  
19:20 秋田空港着 解団式

## 1. 交流事業内容

昨年度と同様、7月に来秋したソウル高校の生徒と、本校の文系、理系両方の生徒が本校で相互交流を通じてお互いの研究内容について協議した。理系の研究テーマは「横手の温泉」、文

系の研究テーマは「人工知能の発展により代替される可能性のある職業」についてであった。それ以降、今回のソウル高校訪問に向けてそれぞれのテーマに沿って研究を続けた。ソウル高校訪問の際は、ソウル高校生の研究成果プレゼンテーション、秋田県から参加した6校から3校が理系、文系どちらかが全体発表で研究成果プレゼンテーションを実施し、その後文系と理系に別れてグループディスカッションを行う二部構成で交流が行われた。本校からは理系が全体発表の場でプレゼンテーションを行った。本校で相互交流した際は、ソウル高校生の英語力、コミュニケーション能力の高さに圧倒されていたものの、それがかえってよい刺激になったのか、前日の夜遅くまでプレゼンテーションの練習を重ね、素晴らしい英語のプレゼンテーションを披露することができ、生徒自身も大きな自信を持ったようだった。

その後に行われたグループディスカッションでは、最初心なしか緊張しているようだったが、自己紹介が終わる頃にはすっかり打ち解けて笑顔になり、一生懸命説明したり質問したりする様子が見られた。本校生徒もソウル高校生にひけをとらないほど積極的に、また堂々と英語でコミュニケーションをとっており、頼もしい限りであった。

以下に、本校生徒の発表要旨を記載する（上：理系、下：文系）。

## About the chemical features of the Hot Springs in Yokote city

KUMAGAI Sayaka, SASAKI Yuka, TAKAHASHI Kosuke  
Geoscience Group Yokote Senior High School

### The Motive for This Research

In nature, fresh water circulates in the forms of rain, spring water, hot springs, and rivers. To protect and manage our water resources it is important to investigate the features of local water sources in order to reveal their regional characteristics.

There are many hot springs around Yokote, which are familiar to many people and they are one of the most important resources in the region. We were interested in what the composition of the hot springs was, how regional features affected them, and why there are hot springs in Yokote if there are no active volcanos nearby.

### Methods & Procedures

We took water samples at 13 hot springs in Yokote: YY-plaza, Sakuraso, Omorikenkouonsen, YutorionTaiyu, Yusenaso, EgaonoOka, Tsurugaikeso, Kyourinso(A&B), Tonami-Kosen, Yuraku, and Yupple. We measured the temperature of the water, as well as the depth of the source. Each sample was collected in a 500ml plastic bottle. Then, we measured eight physical characteristics of each sample, “pH, electric conductivity, and the concentration of sodium ions, magnesium ions, calcium ions, hydrogen carbonate ions, chloride ions, and sulfate ions.”

## Results

According to this research, all of the sampled hot springs had a neutral or weak basic pH, but there was wide variation in levels of electrical conductivity.

The reason why hot springs exist in Yokote where there are no active volcanos, is that melted snow and old seawater are heated by the earth. Moreover, our research shows that the salts Na-Cl and Na-HCO<sub>3</sub> exist in Yokote hot springs. The features of hot springs in Yokote differ based on their point of origin, such as on a mountain side or near a river.



## Development of Artificial Intelligence and decrease in occupations

Akita prefectural Yokote Senior High School  
Shibata Ryunosuke, Kodama Yosuke, Nakano Honami

### 【Reasons for researching】

Information technology has been improving at a remarkable speed in this modern society. Something which used to be imaginary a few years ago is now actualized. Especially, in the AI field, we have developed more powerful and smarter machines that exceed human ability, which will contribute to solving various kinds of problems we are facing now.

On the other hand, excessive development of AI smart enough to have an impact on the job environment is becoming a serious concern. Currently, we can already see AIs working as a guidance staff in stores. We decided to do a survey on human occupations possibly replaced by AIs.

### 【Results of the survey】

In our discussion, we thought cash registers and construction workers were most likely to be taken over by AIs, because they require accuracy and are dangerous jobs. It can be said that the high accuracy of AIs is very useful in increasing the efficiency of work in areas where humans tend to fail. Moreover machines are very helpful as they can do dangerous

### Survey for 2<sup>nd</sup> year students in Yokote Senior High School

Occupations likely to be taken over by AIs		
1 <sup>st</sup>	Cash registers	43 votes
2 <sup>nd</sup>	Accountants	41 votes
3 <sup>rd</sup>	Clerks	32 votes
4 <sup>th</sup>	Drivers	29 votes
5 <sup>th</sup>	Carpenters	14 votes

Occupations not likely to be taken over by AIs		
1 <sup>st</sup>	Teachers	43 votes
2 <sup>nd</sup>	Doctors	35 votes
3 <sup>rd</sup>	Comedians	22 votes
4 <sup>th</sup>	Counselors	21 votes
5 <sup>th</sup>	Clerks	17 votes

work for us. Then we conducted a survey for 208 students in the second grade in Yokote Senior High School. The result can be seen in the left tables. We could see, as expected, that in “Occupations likely to be taken over by AIs,” “cash registers” and “accountants,” both of which require accuracy received the most votes. Furthermore, in “Occupations not likely to be taken over by AIs,” we saw “counselors” had many votes, likely because this job is about human relationships. On the contrary to our expectation, “doctors”, which should require more accuracy than any other jobs, got the second place.

## 【Consideration】



Through examining our survey results, we saw that “clerks” was listed on both tables. It is said that AI will probably replace clerks because the job consists simple tasks. However, when we consider that direct involvement with customers is necessary, it might not be replaced so easily. We cannot classify some occupations clearly. However, we believe our research was a success. By broadening the target audience, we could get more interesting data. Compared with the ranking data which has already published, we hope we have opportunities to also research solutions for decreasing occupations.

研究発表・交流事業の後、生徒はホストファミリーのもとでホームステイを行った。夏に秋田でホームステイの受け入れをした生徒と再会し、その生徒の家庭で受け入れをしてもらうことのできた生徒は、久々の再会に感激していた。一泊だけの短いホームステイだったが、どの生徒も熱烈な歓迎ともてなしを受け、友情を深め、濃密な時間を過ごしたようだった。

今回参加した生徒の一人の感想の抜粋を記載したい。

### 前文略

学校施設見学を終えてからの研究発表では、私たち理数科グループは課題研究で調査した、

横手地区の温泉の化学的特徴についてプレゼンテーションを行ってきました。鶴が池荘、ゆうゆうプラザをはじめとする横手地域 12 ヶ所の温泉をまわり、サンプリングを行いました。温泉水のサンプルの pH や電気伝導度、ナトリウムイオンやカルシウムイオンなどの様々なイオンを測定し、グラフにまとめた結果、川側地域と山側地域の大きく 2 つの成分構成に分類されることがわかりました。日本は火山大国であり、数多くの温泉が存在します。しかしながら、活火山のない横手地域になぜ温泉があるのか、またどのような成り立ちでできているのかということを知り、これを解き明かし、これまでの研究を英語で発表を行ってきました。今まで日本語で発表してきた時と違い、英語で、しかも言葉や文化の違う韓国の生徒を相手にしての発表は大変緊張しましたが、精いっぱい自分たちの研究の内容を伝えられたと思います。

発表後には、ソウル高校の生徒とグループ別で討論する機会がありました。同じグループのソウル高校の生徒は、「温泉水が人体に及ぼす影響」と「環境が人口集団の主要疾患に及ぼす影響」についての研究を行っていました。私たちの研究は身近なテーマが多かったのに比べ、韓国の生徒は、韓国と日本、さらには韓国と世界を比較する研究を行うなど、よりグローバルな視点から研究がなされていました。今回、ソウル高校の発表を聞いて、私たちももっと広い視野からも研究する必要性があったのではないかと考えさせられました。

中略

初めての韓国で、緊張した面もありますが、ホストファミリーの皆さんがとても温かく迎えて下さり、楽しい時間を過ごすことができました。短い時間ではありましたが、すぐに打ち解けることができ、家族になったような錯覚を覚えるほどです。わからない韓国のルールやマナー、言葉などがあれば、すぐに質問していたことがより深く知り合えた要因の一つだったように思います。

韓国は同じアジアで、地理的にも近い国ですが、言葉や文化・習慣など異なる部分も多くあります。しかしこの違いを乗り越え、お互いを理解尊重できる関係を築くことが大切であると思いました。そして今回の貴重な経験を今後の学校生活に活かしていきたいと思えます。

## 2. 次年度以降の交流事業に向けて

今回のような国際交流プログラムが今後も継続されるのであれば、さまざまな場面で各教科や当該学年の職員の協力を仰がなければ実現が難しいと思われる。ほんの 1 日限りのホームステイであっても、家族のように打ち解け、別れの時が迫ると涙を流して再会を約束しあう姿を目にすれば、交流することの意義は非常に大きいと感じる。ホームステイから戻ってからもなお、本校生徒が終始英語、韓国語を交えて会話を続けていたのがとても印象的で、こうした交流がこれほどまでに学習のモチベーションを上げるものか、と正直驚いた。ならば、1 日だけではなくもう少しゆとりのあるホームステイプログラムであってもいいのではないだろうか。国際交流事業を今以上に盛り上げていくためにはもう少し事前の準備が全職員共通のもとで行われたらよいのではないかと感じる。また、生徒の感想にもあったように、研究の進め方もローカルな視点だけでなくグローバルな視点から観察、考察をする必要もあろうかと思う。

### 3. 感想

大変有意義で充実した4日間だった。たった1日だけのホームステイだったにもかかわらず、名残惜しそうにホストファミリーと別れる生徒達を見て、この出会いで得られた友情が、一生涯にわたって続くものになってほしいと願っている。政治や、宗教などさまざまな事情により遠く感じられる国があっても、その国に住む人々と実際に会ってともに時間を過ごせば人情はどここの国に住んでいようと同じであることに気づかされる瞬間が多々ある。こうした瞬間を、「先行き不透明な将来」を生き抜かなければならない生徒にぜひ感じて欲しい。多感な高校生という時期だからこそこうした国際交流から多くを感じとり、様々なバックグラウンドを持つ人々とともに手を取り、将来よりよい国際社会を築く第一歩になってくれるものと信じている。

## 「平成29年度 第1回12高校進学指導協議会」

参加者：田原淳、鈴木亘、塩谷太  
小野寺庸、藤本亮、打矢泰之

- 1 期日 平成29年6月9日（金）
- 2 場所 にぎわい交流館AU 4階研修室

### 3 概要

- 報告1 「共通テスト導入に向けて」 ベネッセコーポレーション 谷本 祐一郎
- ・当面は年1回の実施。1月中旬の2日間。2019年度に確定実施大綱を公表予定。
  - ・記述式問題は、現代文と数学Iで導入。
  - ・英語の認定試験については、A案（2020年以降認定試験のみ実施）とB案（2023年までセンター作成試験と認定試験の併用、大学がどの試験かを選択）で検討中。
  - ・入試改革で、一般・AO・推薦どの試験でも学力の3要素が求められる。調査書や志願書作成に向けて1～3年までの活動記録を残しておく必要あり。
  - ・推薦やAOの定員拡大で後期の枠が減るかも。推薦・AO+前期という受験プラン。
  - ・近年思考力を問う入試問題が増加。探求学習を通して思考力養成。課題設定が大切。
- 報告2 「新しい入試制度に向けた高校の取り組み」 湯沢高等学校長 阿部 淳
- ・多くの高校で新テストへの取り組みが未対応との回答。
  - ・リサーチ、計画、実践、評価のサイクル。計画は小刻みに。実践は記録化。
  - ・勉強することで生徒の可能性や視野が広がり、職業研究にもつながるということを教師は生徒に伝える必要がある。挑戦させるための声かけ、全員が同じ方向に向かう集団作りをする。
- 研究協議 「平成28年度の進路状況」
- 〔能代高校からの報告〕
- ・国公立大志向が強い。私大受験は3割減。県内・教員・看護が人気で資格重視の傾向。
  - ・3年前の3年部のスタッフが多く残り、前回のリベンジを目指した。英語科を中心に補習で底上げを図ったが、他の教科に広がらず、英語だけは得意という生徒が多かった。
  - ・生徒全体で学力層の幅が狭く、まとまった成績。下位者に手がかからなかったことが進路実績につながった。
  - ・推薦AOの対策が不十分であった。志望理由書を作成する段階でもっと担任の指導力が必要である。
- 〔秋田西高校からの報告〕
- ・全校体制での進路指導を徹底。教師・生徒全員に当事者意識を持たせる。

- ・センター試験レベルを意識した授業を実施したことで、公務員1次や看護学校の不合格者が減少した。
- ・推薦AOを通して自信のない生徒にチャンスを与え、挑戦させ、生きる力を養成。
- ・先輩の成功体験が在校生の目標や自信につながった。
- ・推薦書や志望理由書を複数の教師でチェックし、何度も修正させる。
- ・教員の個性を活かし、生徒の割り振りをする。あくまでも個人ではなく、チームで生徒を指導することを徹底した。

## ○分科会

### 第1分科会「難関校受験指導」

参加者：塩谷 太

#### ◎ 難関大指導

各校とも、東北大オープンキャンパスなどの動機付け、及び2年次途中からの希望者対象の補習(主に昼休み)・添削等の指導を実施しているようである。(秋高以外)

秋高は、授業で十分(東北大入試対応レベルの授業を自負)と考えている節はあるが、AOIIに関しては、かなりの戦略を巡らしており、早期の準備をしている。

AOIIに関しても、合否のポイントや対策等の話題となったが、どれも確信を持てる内容とは言えず、推測の範疇を脱しなかった。ただ、希望者に対しては積極的な出願を拒むものでは無いという点では各校一致した見解である。

#### ◎ 超難関大指導

主に、秋高・本校・鳳鳴の実践について他校から質問があった。秋高も、超難関志望者(20~30名)に関しては、早期から特別指導を心掛けているようだ。

その他、特に話題にならなかったが、秋高の進路年間計画から2つほど気になった点を上げたい。(本校が真似できる類いの事では無いが・・・)

- ① 1年生の長期休業明け実力試験で物理・化学を実施。
- ② 2年生の希望者が大学別模試(冠模試)を受験可能。

### 第2分科会「中堅国公立大学受験指導」

参加者：鈴木亘、小野寺庸

- ・中堅国公立大学受験のための具体的な対策について

12高校の中でも中堅国公立大学の線引きが定まっておらず、学校間で考え方に差があるが、中堅国公立大学受験のための具体的な対策は行っていない学校(大館鳳鳴、秋田、秋田南、秋田中央、横手)とAO、推薦入試対策を重視している学校(能代、秋田西、秋田北、湯沢)に二分された。さらにAO、推薦対策を重視している学校の全てで、全職員体制で指導に当たっている。特徴的なものとしては、教師が自分の得意とする分野を3つ挙げ、グループ単位で指導に当たる「エキスパート制」(秋田北)、同じ志望の生徒でも、あえて違う担当者に指導させる「チューター制」(角館)などがあった。課題や問題点として、教員間の温度差の話題もあがった。

- ・AO、推薦入試の利用および状況について  
(各校の資料参照)

・今後の対策について

時間がなかったため十分な協議はできなかったが、各校とも早い段階からの指導が必要との意見が多かった。

第3分科会「1・2年のこれからの進路指導」

参加者：藤本亮 打矢泰之

各校から進路指導の取り組みを報告し、次のような意見交換を行った。

- ・R-CAPを文理選択などの進路指導に活用している学校が多かった。
- ・探究活動を通して生徒に表現する力を付ける。生徒の努力を評価することで、さらに意欲を高めていく。
- ・従来は1つの職業に特化して進路研究の幅を狭めた生徒が多かったため、職業から逆算する進路指導を改めた。大学教員の講話を実施したところ工学部志望者が増えた。
- ・保護者から医療系のインターンシップを希望する声があり、行政機関の協力を求めたが、なかなか受け皿が見つからない。市役所や簡易裁判所のみ。
- ・生徒の文理選択が学校のクラス編成とマッチしない。文理融合のハイブリッドクラスを編成したが、クラスの一体感を作りにくい。時間割の組み方も難しい。

## 「平成29年度 第2回12高校進学指導協議会」

参加者：田原淳、鈴木亘、沓澤信宏  
高見直子、能美政通、古谷祥多

1 期日 平成29年12月4日（月）

2 場所 秋田県総合教育センター

### 3 概要

○講演「高大接続改革と他校の取りくみ」 講師 河合塾 東北本部 谷口哲也 氏

・英語4技能試験に向けた英語力の育成

- ・民間の検定試験の結果は、大学入試センターで一元的に集約→受験大学に提供
- ・成績表示は段階別（6段階）
- ・高3の4～12月の間に2回まで受検
- ・国大協は2020年～23年まで、国立大全82校の受験生に民間試験と現行のマークシート試験の両方を課す方針

・大学の動き

・大学入試で問われる学力5パターン

- ①高等学校の教科の知識・技能
- ②大学の志望分野でも必要な思考力・分析力
- ③入学後の学習意欲と基本的な対話力
- ④自分の考えを論理的に示す表現力
- ⑤高校時代までの積極的な活動・実績

・早急に大学に決定して欲しいこと

- ①2021年度入試の科目と共通テストの活用方法
- ②2021年度入試での英語外部資格試験の活用方法
- ③一般選抜の個別試験出題方針の変更点とイメージ問題例の公開

・「大学入学共通テスト」モデル問題例分析結果

・記述式問題のモデル問題例

国語 新しい傾向

現行のセンター試験に比べると内容も把握しやすい  
思考力・判断力・表現力を問う問題の幅はさらに広がる  
記述式という点で、難易度は現行のセンター試験よりも上がっている  
条件付記述ということで、一定の解答を導きやすく、採点しやすい

数学 新しい取り組み

難易度は特にモデル問題例3が高く、数学の苦手な理系生や文系生では発想自体が難しい

モデル問題例のような設定・難易度・採点基準では、「大学入学希望者を選抜する」という点では、センター試験ほどは機能しないのではないか

・マークシート式問題のモデル問題例

国語 古文は現代文との融合問題

複数のテキストを関連づけて思考・判断させる問題

現代文・古文ともに、現行のセンター試験と比べるとやや易しい

数学 学んだ内容を日常生活と結びつけて考えさせる

長い問題文が出題されており、必要な情報を抽出するのに時間がかかる

・個別学力検査で思考力・判断力・表現力を問う問題

・高校での取り組み－思考力・判断力・表現力を中心に－

・山梨県立韮崎高等学校

歴史的思考力を育成・評価－世界史の取り組み

・島根県立出雲高等学校

探究科目で多面的能力を評価

○分科会

分科会1「AO・推薦入試についての各校の現状と課題」

参加者：鈴木 亘

各高校のAO・推薦入試に関する指導状況について議論が進められた。各校とも近年AO・推薦入試に出願する生徒の割合は増加してきており、その指導に対して体制的なものが追いついてきていないのが現状である。特に、小論文の指導については前々から指摘されてきたことではあるが、国語科への負担が大きい。それを回避して全員で指導する体制を取っている高校もあるが、全体としてはあまりうまく機能はしていないようだ。

小論文指導に対しては生徒に自己採点をさせる工夫について、今後も情報交換を進めていくことが確認された。また、基本的には授業の中でその力を養っていくことが大切であろうという結

論になった。各教科を担当している職員それぞれが、小論文指導を意識した授業展開を進めていくことで、特別な指導をする負担が減るはずだという意見があったものの、全職員が同じ意識を共有することについてはかなりハードルが高いという意見が大勢を占めた。

分科会2「国公立大学の個別試験対策への取り組み方について」 参加者：高見 直子

参加各校から、3年生に対する一年間の指導の流れや力を入れている部分について紹介があった。全県総体明けからの放課後補習や夏休みの特別補習、センター直前期の演習、センター後のコース別記述対策など、大まかな流れは多くの高校で共通していたが、中には難関大受験者のための模試を学校で用意したり、小論文対策にチーム体制であたりと、自校の生徒の実情にあわせて工夫している取り組みの紹介もあった。また、土曜授業の運営のしかたについても話題にのぼったが、こちらについては完全に廃止した学校と、規模を縮小しながら存続させている学校とに分かれた。廃止した学校の経緯については、部活動の大会と土曜日が重なって生徒が集まらない、特に3年生は模試と重なることが多く講座形態で実施できないなどの様々な事情があった。一方で存続している学校の取り組みとしては、希望者を募って志望別に集団を分けて指導するという内容の学校が多かったように思う。各校とも、難関大志望者や推薦希望者を囲い込んでの早期対策や、第一志望に向けてのモチベーションを持続させることを中心に、対策のしかたを模索しているようだった。

分科会3「低学年次の上位層の指導方法について」 参加者：能美 政通

土曜補習について

実施している学校では、基本的に実施するものという意識が職員間で共有されているが、部活動等のこともあり、教職員・生徒ともに、なかなか揃わず、計画的で、効果的な実施が難しい面がある。一方で、一定の成果が認められる実施校では、効果を出すための内容、実施形態、教科間・教員間の意志の共有など、明確なビジョンのもとに行われており、また、そうでなくては、行う意味や実施の効果はないのではないかとの意見が出た。

実施している学校でも、土曜補習の効果には疑問の声もあり、廃止の声もあるが、本格的に議論にまでに至らず、前年踏襲でとりあえず行っているという面もある。

廃止を検討したり、今年度廃止をしたり、昨年度や一昨年度に廃止をした学校では、そのことにより状況が改善したと結論するまでには至っておらず、一部、有効な代替案を見出すに至らず、危機感を募らせる学校もあった。

上位者対策の補習について

実施している学校では、難関大向けや医学科向けで対策が行われている。内容は、模試の過去

問の演習や進路講話、添削に週末課題+ $\alpha$ など、さまざまだが、土曜補習以上に、どのような力を、いつまでに養成するのか、どのような教科を、どのような形態で実施するのかなど、学校のビジョンをもとに、しっかりとした計画を立てて組織的に行われるものでなければ、効果は薄く、また継続するものになっていかないだろうということであった。

## 平成29年度あをくも人材育成事業—東北大学訪問—

進路指導部 高見 直子

平成29年7月24日(月)～25日(火)、本校OBで現在東北大学に在籍している学生と、本校1・2年生の東北大志望者による交流会を仙台市内にて実施した。あわせて、東北大学で開催されていたオープンキャンパスに参加し、各研究室の様子や大学の講義の様子などを見学してきた。参加生徒にとっては、実際に3つのキャンパスを訪れて最先端の研究に触れ、体験的な活動を通して情報収集と探究力を開拓する非常に良い機会となった。以下に事業の詳細を報告する。

### I 日程

- 【第1日】 13:30 夏期補習終了後バス移動  
17:30 宿舎到着・夕食  
19:00～20:30 本校卒業生(東北大生)との懇談会  
○【宿舎】アークホテル仙台青葉通り  
仙台市青葉区大町2-2-10  
\*懇談会も同ホテル内の会場で実施。
- 【第2日】 6:00～8:00 起床・準備・朝食  
8:30～9:00 バス移動(川内キャンパスへは徒歩にて移動)  
9:00～15:30 オープンキャンパス参加・大学内見学  
○各自自由に大学校内を見学。各自で適宜昼食を摂る。  
16:00 宿舎集合後バス移動  
20:00 学校到着・解散

### II 本校卒業生との懇談会について

懇談会には、本校112期(平成28年卒)の学生13名と、111期(平成27年卒)の学生10名が集まってくれた。宿舎となった仙台アークホテルから2会場をお借りし、理系会場と文系会場に分かれて実施した形である。

理系学部会場では、OB1人を参加生徒7～10名程度で囲むようにし、大学生活の様子や自分が研究していること、また高校時代にどのようにして東北大合格を目指して勉強していたかといった話題について熱心に話を聞いた。参加者の中には事前に質問を用意していた生徒も多く、先輩・後輩双方からのやりとりが絶えないテーブルも見られた。一方の文系会場では、時

間を決めて座席の入れ替えを行い、参加生徒がすべてのOBの話を聞けるようにして進行した。こちら、「オープンキャンパスでぜひ見ておいてほしい場所」や、「高校在学中にこれだけはやっておくと良い勉強法」などを学生が親身になって話してくれたことで、参加生徒にとっては非常に有意義な時間と感じられたようだった。後日回収した感想用紙を読むと、この時の懇談会で先輩から直接得た情報が、今後東北大を目指していくにあたって大変役立ったというコメントや、現役東北大生、しかも母校出身の先輩に話を聞いて、非常に勇気づけられたという声もあり、毎年恒例となっているこの懇談会が、この事業の中では大きな意味を持っているということを改めて実感した。



↑円卓にOBの学生を囲み、熱心に質問する参加生徒の様子。かつて横手高校で過ごして得た経験や、母校の後輩だからこそ聞ける話題が数多くあった。

OBの学生には、進路指導部職員や在学中の担任・学年部職員があらかじめ参加を呼び掛けた。在学当時にこの行事に参加した経験のある学生が多かったこともあってか、ほとんどの学生がこの行事の趣旨を理解し、快く懇談会への出席に応じてくれたように思う。話をする学生達の表情からは、かつて先輩からこの会でアドバイスされたことを、今度は自分が後輩に伝えるのだという、一種の使命感や責任のようなものも感じられ、学生にとっても単なる大学説明に終わらない、特別な時間になったのではないかと思う。そういった点で、この交流会は「あくも事業」の行程の中でも大きな位置を占めるといえる。

### Ⅲ キャンパス見学について

希望学部ごとにバスや徒歩に分かれて宿舎を出発し、1日キャンパス見学を行った。青葉山・星稜キャンパス見学者は宿舎からバスで移動、川内キャンパス見学者は徒歩で移動し、大学到着後は各自自由にキャンパスを移動し、時間の許す限り第1志望以外の学部も広く見学して比較できるように計画した。2年前に川内キャンパスへ地下鉄の路線が通じたことで、キャンパ

ス間の移動がしやすく、参加者の中には1日で3つの学部・学科を回ることができたという生徒もいた。参加生徒の人数の内訳および見学の感想について以下に示す（生徒の感想は、オープンキャンパス後に提出された報告書による）。

### 《参加生徒人数の内訳》

キャンパス	青葉山				星稜	
学部	理	農	工	薬	歯	医
参加者1年	14	5	22	17	1	38
参加者2年	10	2	23	7		12
参加者計	24	7	45	24	1	50

キャンパス	川内				
学部	文	経済	教育	法	
参加者1年	15	20	28	11	171
参加者2年	5	4	4	4	72
参加者計	20	24	32	15	243

### 《参加生徒による大学見学の感想》

参加するのは2回目だったが、今回は昨年と違うところを見てこようと思い工学部を選んだのだが、驚いたり感心したりすることが去年以上に多かった。特に驚いたのは、工学系の技術が多く医療の分野で使われており、医療の大きな進歩を手助けしているというところだ。工学科では、工学系の技術を身につけるのはもちろんだが、実際に研究するには生物、環境、情報など、他の分野の知識も必要なのだということを改めて知ることができた。オープンキャンパスに行く前は、色々と手探りで自分のやりたいことが分からない状態だったが、キャンパスを実際に見ることでイメージを掴むことができ、少しずつ自分のやりたいことが分かってきた気がする。（2年・男）

オープンキャンパスに参加してみて、工学部の施設の充実ぶりに驚きました。国内でもトップクラスの学習環境があるので、行われている実験や展示されているものがとても面白く、興味深かったと思います。中でも特に、エタノールをつけた絆創膏を使って酒に強いかわいさを調べる実験と、足こぎ車椅子を使った空中散歩の疑似体験が面白いと思いました。この二つはどちらも医工学に関わるものですが、今回の見学を通じてその魅力を知ることができました。元々は情報工学に興味があって参加したのですが、実際に大学を訪れることで学問への印象も少し変化したように思います。（2年・男）

医学部の色々な所に行って、自分の興味や関心が広がったように感じました。「医学」といってもたくさんの分野や職業があるので、自分の本当に目指すべきところはどこなのか、もっと考えていかなければならないと思いました。実際にキャンパスの様子を見て、大学生活がどんなものかイメージできました。今回の見学によって東北大合格へのモチベーションが高まってきたので、夏休み後半の勉強に力を入れていきたいです。(2年・女)

2年生の中には昨年につき2回目の生徒も多かったが、改めて大学の研究内容を知り、自分の志望進路を固めるための大きな材料になったと感じた生徒が多かったようである。紹介した文面でどの生徒も述べているように、自分のやりたいことを明確化する良い機会になったのではないだろうか。一方の1年生の方からは、「大学」という場所を具体的にイメージする意味で、この行事への参加が非常にためになったという声が大きかった。前日の懇談会で先輩から聞いた話を含めて、今後の学習に対する意欲が高まったという感想も数多く見られた。

### Ⅲ 行事の継続に関する今後の課題

今年度は、参加学生の所属学部やや偏りがみられ、生徒が志望している学部すべての学生が集まらないという状況であった。そこで河合塾仙台校の協力を仰ぎ、理学部と法学部の学生(チューター)2名にも、懇談会に参加してもらった。2人とも非常に話し慣れていて、上手な説明で参加生徒を話の中に引き込んでいた。また、生徒の志望している学科の学生がいないというテーブルもあったが、参加してくれた学生たちがフォローして一生懸命説明してくれている姿も見られ、だいぶ学生・チューター側に頑張ってもらったという印象が強い。今後この懇談会を継続していくにあたっては、生徒の志望と学生のマッチングという点をよく考えて計画していく必要がある。また、懇談会を開けるぐらいの規模の会場の確保が難しいという点も今後の課題である。今年度まで利用させていただいていた仙台アークホテルが改装のため来年度からは使用できず、宿舎とともに懇談会会場の確保について、これから進路指導部で検討していかななくてはならない。生徒にとって得られるものの大きいこの会を、できれば最良の形で今後も継続していきたいところである。